みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

民族学資料の保存と修復：博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復：機関研究：民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究―ロシア民族学博物館との国際共同研究（2012-2014）

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 史郎 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005843

PROJECT

民族学資料の保存と修復──博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復

文
佐々木史郎

機関研究 ● 民族学資料の収集・保存・情報化に関する実践的研究──ロシア民族学博物館との国際共同研究（2012-2014）

元興寺文化財研究所見学（2013 年 1 月 24 日、伊藤敦規撮影）。

2013 年（平成 25 年）1 月 24 日～ 28 日という日程で、国際ワークショップを開催した。とはいっても、国際共同研究の相手であるロシア民族学博物館から 3 人の保存修復の専門家を招待してのワークショップである。このワークショップは、2012 年度から 3 年にわたって実施するこの機関研究プロジェクトの初年度の計画である、「民族学博物館における資料の保存と修復」に焦点を当てて、その現場（博物館のバックヤードや修復工房）を視察しながら、情報と意見を交換するという形式をとった。今回は国立民族学博物館（以下、民博）准教授の日高真吾の尽力により、本館以外に、視察と討論の場として、元興寺文化財研究所と奈良国立博物館（以下、奈良博）の協力を得ることができた。

まず、訪れたのは元興寺文化財研究所である。ここにはおもに文化財の保存処理と修復を手がける工房があり、焼き物類（土器、陶器など）、金属製品、木製品、紙製品、布製品など素材ごとに保存、修復現場を視察し、手法や補強・修復用の媒材、素材についての説明を受け、それぞれの効用について討論を行った。続いて、奈良博にて、木彫、装潢（そうこう）、漆工の専門家を迎えて、漆、紙、木質、骨角などの素材でできた文化財の修復に関する研究報告とそれについての討論を行い、また同博物館の修復室を見学して、その現場で意見交換を行った。さらに民博に場所を移して、資料の保存方法と博物館のバックヤードの使い方に関する報告と討論を行い、民博のバックヤードを見学した。

奈良博、民博で行われた研究報告の詳細は表にあるとおりである。

奈良博でのワークショップでは、木彫、紙製品、漆製品の各専門家の報告をロシア側が非常に熱心に聞いており、どのような素材に対してどのような修復技術と材料が必要となるのかという技術的な観点のみならず、いかなる方針を持つのかという点にも大いに関心を示していた。ことに依頼してきた人々の要望に応えて、あるいはそれを汲み取って修復するという姿勢に注目していた。

ものは作られた瞬間から古びていく。その果てに破損、滅却などに至るが、修復とは、ただ初めの状態に戻せば良いというものではない。例えば、財団法人美術院の門脇豊の報告では、多くの仏像は現時点では、ある程度古びた状態（色彩の剥落や部材の欠損など）にある。しかし、仏像は信仰の対象であり、人々は現在の状態をもってお参りしているために、作られた当初のきらびやかな状態に戻してしまってはイメージが損なわれて、修復を依頼した人々の要望に合わない。したがって、仏像、ことに村人の信仰を集める寺の仏像などの修復では、なるべく現在のイメージを壊さないような修復、例えば色彩を完全には復元しない、新しい部材で補強した部分に古い感じを出すような塗色を行うなどを心がけるという。

国宝などの修理を手がける美術院は、広く仏像や神像の修復を手がけている。その際には文化財指定の有無は一切関係なく、必要な技術と材料、そして情熱を投入して修復に取り組む。しかし、それと同時に社会との対話も欠かさない。すなわち、寺の住職やお参りに来る人など、依頼者のニーズをしっかり取り込むのである。

翻って、民族学博物館がその資料の修理を行う、あるいは依頼するときには、日本でもロシアでも、どのような方針を持っているのだろうか。資料の属性、あるいはその資料の作成者や資料を有していた文化集団の要望の有無などによってケース・バイ・ケースではあろうが、修復する職人たちが美術院に見られるような見識を持っているとすると、依頼する博物館側も個々の資料についてしっかりとした修復のための基本方針を持っていないといけないことになる。いいかえれば、破損した資料の修復は、保存修復担当の教員に任せっきりにするのではなく、自らが収集した資料、あるいは専門とする地域や領域の資料については、博物館としてどのような修理が必要になるのかについて、収集先とも情報交換しながら、常日頃からしっかりと考えておかなければならないということである。

もう 1 点ロシア側と私たちが注目したのは、修復の際に

奈良国立博物館でのワークショップ（2013 年 1 月 25 日、伊藤敦規撮影）。

国際ワークショップのスケジュール　2013 年 1 月 24 日～ 28 日　場所：国立民族学博物館、奈良国立博物館、元興寺文化財研究所
「民族学資料の保存と修復――博物館バックヤードの利用効率向上と自然素材資料の修復」
“Conservation and restoration of ethnological materials: effective use of museum backyards and restoration of objects made of natural materials.”

1 月 24 日（木）　場所：元興寺文化財研究所	
13:00 ～ 15:00	文化財並びに民俗資料の修復作業の視察
1 月 25 日（金）　場所：奈良国立博物館	
9:20 ～ 9:30	趣旨説明　佐々木史郎（国立民族学博物館）
9:30 ～ 10:30	**「漆工文化財の修理について」**北村　繁（北村昭斎事務所）／ 10:00 ～ 10:30　質疑 20 分 休憩 10 分
10:30 ～ 11:20	**「東洋絵画・書跡の修理について」**山本記子（株式会社文化財保存）／ 11：00 ～ 11：20　質疑
11:20 ～ 13:00	工房見学　／ 12：00 ～ 13：00　昼休憩
13:00 ～ 14:00	**「彫刻の修理について――仏像・神像等文化財彫刻」**門脇　豊（財団法人美術院）／ 13:30 ～ 14:00　質疑 20 分　休憩 10 分
14:00 ～ 15:00	ロシアからの修復事例報告／ 15:00 ～ 15:10　休憩
	「非伝統的手法による伝統的修復方法――民族資料修復に際しての美術品修復手法の応用」、「団扇――象徴、表徴、美術品（サンクトペテルブルクの博物館に所蔵されている資料の修復より）」エレーナ・ヤンコフスカヤ
	「予防保存のための仕組み――ロシア民族学博物館の事例より」ヴィクトリア・ペルヴァク
15:10 ～ 16:20	ディスカッション　司会：日髙真吾（国立民族学博物館）
16:20 ～ 16:30	総括および挨拶　佐々木史郎（国立民族学博物館）
1 月 26 日（土）　休日	
1 月 27 日（日）　場所：国立民族学博物館（第 4 セミナー室）博物館関係者、研究者、学生、メディアなどに公開、ロシア語＝日本語同時通訳付き	
9:30 ～ 9:40	開会式、参加者紹介　事務的な説明
9:40 ～ 10:00	趣旨説明　佐々木史郎（国立民族学博物館）
10:00 ～ 16:10	発表各 40 分、11：20 ～ 11：40　休憩、12:20 ～ 13:30　昼休憩、14:50 ～ 15:10　休憩
	「有機材質の民族標本の修復――木、骨角、草、羽毛、貝」エレーナ・ヤンコフスカヤ（ロシア民族学博物館）
	「東日本大震災における民俗資料の修復」日髙真吾（国立民族学博物館）
	「博物館のバックヤードの活用――サンクトペテルブルクの博物館の事例より」アンナ・ニコラエヴァ（ロシア民族学博物館）
	「北方民族博物館における民族資料の保存と管理について」中田　篤（北海道立北方民族博物館）
	「博物館資料を害虫から守る――昆虫・カビ・細菌類の除去について」ヴィクトリア・ペルヴァク（ロシア民族学博物館）
	「予防保存と資料管理：国立民族学博物館の事例から」園田直子（国立民族学博物館）、和髙智美（合同会社文化創造巧芸）、橋本沙知（橋本文化財企画）、河村友佳子（文化財環境リサーチ・河村）
16:10 ～ 17:00	総合討論
17:00 ～ 17:10	閉会式
1 月 28 日（月）　場所：国立民族学博物館（第 1 演習室）	
9:40 ～ 10:00	集合、事前説明
10:00 ～ 11:00	展示場見学と解説
11:00 ～ 12:00	展示に関する討論
12:00 ～ 13:00	昼　食
13:00 ～ 15:20	バックヤード見学と解説／ 15:00 ～ 15:20　休　憩
15:20 ～ 16:30	民博バックヤードに関する討論

使用される素材あるいは媒材である。ワークショップで報告した参加者は全員何らかの資料の修復にあたった経験を持っている。木彫にせよ、絵画や書にせよ、漆工にせよ、あるいはロシアの資料によくある骨角製品や皮革製品、石彫などにせよ、修復に際してはまず資料の材質を調べて、欠損部分にはできるだけオリジナルの材料を用いようとする。古代から伝わる文化財などには現在ではもはや手に入れることができなくなっていたり、作り方がわからなくなっていたりするような素材が使われていることが多い。また、民族資料でも絶滅危惧種の動植物が材料として使われていたり、製作技術が失われたことによってもはや誰も作れなくなっている資料があったりする。そのよう場合でも修復師たちはできるだけオリジナルに近い素材や媒材を探したり開発したりする。しかし、場合によっては必ずしもオリジナルな素材や媒材を使うことがベストであるとは限らない。修復後の保存環境や使用状況によっては現代の化学合成された素材や媒材、すなわち合成樹脂や合成接着剤などを使う方が資料にとっては良い場合もある。ロシア側の研究者たちはどのような場合に合成素材や媒材を使用して良いのか、熱心に視察、質問していた。

人類学者は物質文化を扱いながらも、自らが収集した資料の保存や修復に関してはまったくの素人である。したがって、修復の専門家たちから見れば、人類学の参加者たちは初歩的なことに驚いたり、感心したりしていたはずである。しかし、民族学の標本資料を、資料としてではなく「作品」として見る、そしてその「作品」のどこがどのように破損し、どこをどのように修復するべきかという視点で標本資料を見るという姿勢は、人類学者には実に新鮮に見えた。

人類学者はどうしても資料の背景にある社会的、文化的文脈（コンテキスト）にとらわれてしまう。たとえそれを芸術作品や文化財として扱っても、人類学者の研究ではその作品の文化的、社会的個別性の方に関心が向く。それが人類学の研究ではあるが、保存や修復の専門家たちは資料が持つ文化的な個別性を超えた、人間が造り上げた造形物としての普遍性に着目している。当然彼らも社会的要望を汲み取るようにするなど、その資料の社会的、文化的な文脈を大切にはするが、いざ修復作業に入ると、目の前にあるのはあらゆる文脈から開放された造形物である。

おそらく「物質文化研究」には人類学者の目と修復専門家の目の双方の視点が必要なのだろう。これは、保存修復の素人としての感想ではあるが、修復専門家たちの仕事場をロシアと日本で垣間見て、「モノ」に相対する人間（研究者、現場の職人）に求められるある種の美学、哲学といった思惟の奥深さに気づくことになった。

ささき しろう

先端人類科学研究部教授。専門は文化人類学、特にシベリア、ロシア、極東の先住民族の近現代史研究。編著に *Human-Nature Relation and Historical-Cultural Backgrounds of Hunter-Gatherer Cultures in Northeast Asian Forests: Russian Far East and Northeast Japan* (Senri Ethnological Studies 72)。共編著に『東アジアの民族的世界：境界地域における多文化的状況と相互認識』（有志舎 2011 年）など。